

まんが家たちの〈戦争〉

— 飢餓・生命・倫理をめぐる手塚治虫・やなせたかし —

吉田直哉

大阪公立大学

War experiences of Tezuka Osamu and Yanase Takashi

Yoshida Naoya

Osaka Metropolitan University

抄録：本稿は、手塚治虫とやなせたかしの戦争体験と、それが彼らの作品世界や人間観に与えた影響を明らかにするものである。手塚は、勤労働員中に大阪大空襲を経験し、爆弾の炸裂と機銃掃射によって殺戮される一般市民の惨状を目の当たりにした。やなせたかしは、陸軍兵卒として日中戦争に従軍し、強烈な飢餓を経験した。それぞれの戦争経験から、手塚は、生命の儚いがゆえの尊厳を終生の創作のテーマとし、やなせは最も耐えがたい苦痛である飢餓を、文字通りの〈献身〉によって救うヒーローを創造した。

キーワード：手塚治虫、やなせたかし、反戦思想、空襲、従軍体験

はじめに：〈戦争〉という原体験

戦後、日本におけるまんが文化の創成と興隆に尽力したまんが家たちの中には、戦争体験のある者が多く含まれている。戦争体験は、少年期から青年期にかけて戦争の惨禍を潜り抜けた彼らの人生観、作品世界に、様々な形の印影を投げかけている。本稿では、『鉄腕アトム』の作者として知られる手塚治虫、『アンパンマン』の作者として知られるやなせたかしの二人の戦争体験と、それが彼らの人生観・作品観に及ぼしている影響を確かめてみたい。二人の略歴については後述するが、出生年について見ると、やなせたかしは1919（大正9）年生まれのおいゆる「戦中派」世代、手塚治虫はそれよりやや遅れて1928（昭和3）年生まれのおいゆる「少国民」世代に当たる。9歳という微妙な生年の違いが、戦争体験にも影響してくる。

戦争を経験し、それを作品として表現しているま

んが家としては、二人以外にも、『ゲゲゲの鬼太郎』作者の水木しげる、『あしたのジョー』作者のちばてつや、『はだしのゲン』作者の中沢啓治らがいる。水木は1922年生まれ、終戦時23歳で、1943年に南洋戦線のニューブリテン島ラバウルに出征して連合軍と過酷な戦闘を経験し、マラリアに罹患したうえ、敵機の爆撃を受けて左腕を負傷、無麻酔で左腕の切断手術を受けるなど辛酸をなめた（1946年に復員）。ちばは1939年生まれ、終戦時6歳でむろん従軍経験はないが、居住していた満州国奉天から、敗戦後の大混乱の中、翌1946年、家族と共に舞鶴に引き揚げた。中沢は1939年生まれ、終戦時6歳で、国民学校1年生の時、郷里広島で原子爆弾に被曝し、父、姉、弟の三人の家族を失っている。このうち、水木と中沢は、それぞれ、自らの戦争体験に基づくまんが作品を発表していることで知られている。

1. 手塚治虫の場合

手塚治虫の作品の中に、15年戦争を直接描いたものは少ない。しかしながら、そのことは、彼が「戦争」を描くことを忌避していたということではない。手塚は、歴史もの、SFもの、動物ものなど、様々なジャンルにおいて、「戦争」を持続的なテーマとして、明示的に、あるいは潜在的に取り上げ続けてきた。

手塚は、1928年11月、大阪府豊能郡豊中町（現・豊中市）に生まれ（本名・治）、5歳のとき兵庫県川辺郡小浜村（現・宝塚市）にあった祖父の屋敷に転居した。幼少期を過ごした新興住宅街の宝塚では、裏山で昆虫採集に熱中し、母とともに宝塚歌劇に親しんでいる。1935年、池田師範学校附属小学校（現・大阪教育大学附属池田小学校）に入学、1941年に大阪府立北野中学校（現・大阪府立北野高等学校）に入学するも、同年アジア太平洋戦争が勃発する。予科練を受けるが、近視のため不合格、1944年一里山健民修練所（仁川）に在籍している間、腕にびらん性白癬症（水虫の一種）を患い、上肢切断の危機に遭う。1945年3月、旧制北野中学を繰上卒業する。動員が免除されないまま、大阪石綿（中津）で勤労働員中、6月の大阪大空襲（第三次）に遭遇した。この被災経験は、のちに繰り返し彼の作品に描かれることになる。7月、大阪帝国大学附属医学専門部に入学する（阪急宝塚線で宝塚から、当時は中之島にあった阪大に通学していた）。手塚が入学した医学専門部とは、戦時下、軍医を速成するために設けられた医師養成施設であり、医学専門部に入れば、卒業までは兵役が免除され、入隊しても前線に配属されることはないために志望したものである（手塚以外にも同様の理由での進学者が多く居た）。

戦後、1947年の長編漫画単行本『新寶島』刊行で注目を集め、1950年に『ジャングル大帝』連載を開始する。1951年には、1年留年していた大阪大学附属医学専門部を卒業、翌1952年に医師免許を取得。同年、『鉄腕アトム』連載開始。1961年には、奈良県立医科大学から医学博士の学位を授与されている。1963年には、日本初毎週30分枠のテレビアニメシリーズ『鉄腕アトム』がフジテレビにて放送開始され、アニメーション技術の開発に尽力する。その後も『火の鳥』、『ブラック・ジャック』などの長期

連載を続けたが、1989年2月、スキルス性胃癌により死去した（60歳没）。

旧制中学時代、授業はまともに行われなかったという。手塚は、学友らと共に、淀川下流の三国にある飛行機工場の格納庫の屋根を製造する工場ですレート（セメントの板）の生産に従事したりしていた。大阪市周辺に対する空襲が激化したのは、1945年3月以降であった。

手塚がたびたび作品に描いた空襲は、3月13日から8月15日にかけて計8次にわたって実施された大阪大空襲のうち、6月7日の第三次大空襲であったと考えられる。手塚の作品中には、空襲を「3月」と表記しているものもあるが、3月中の空襲はいずれも夜間に実施されたため、手塚が作品で描いているような日中の空襲ではない。6月7日の第三次空襲時、手塚は学友たちと中津の大阪石綿の工場で動員労働中であった。大阪石綿の工場は、現在の阪急中津駅（宝塚線）の北東ほど近くにあり、手塚は1944年9月からここに勤労働員されていた。

第三次空襲を実施したのは戦略爆撃機 B29の409機、戦闘機 P51ムスタングの138機、計547機であった。8次にわたる空襲のうち、この機数は最多である（本空襲での B29の損失はわずかに2機）。標的は、市内南東部、沿岸部の工場地帯を標的とした第一次、第二次空襲では被害が軽微であった市内東北部、特に大阪城北東に位置していた陸軍造兵廠であった（現在の大阪ビジネスパーク、大阪城ホール周辺）。サイパンを離陸し北上した米軍編隊は、淡路島の洲本を進入点として北東に進路を変え、80分間ほどの爆撃を行ったのち、東進して生駒山以東へ脱去した。都島区・大淀区（現在の北区）・福島区・淀川区を中心に、焼夷弾による甚大な被害があり、淀川両岸はブローニング M2（12.7mm）重機関銃を6丁装備していた P51ムスタングによる機銃掃射を受けた。記録に残る被害は、死者・行方不明者2832人、被災戸数5万8165戸であった。

11時9分、昼前から始まった空襲が収まったのは12時28分頃であった。その直後から、手塚は避難を試みる。工場にほど近い淀川の堤防が空襲時の避難地になっており、そこに多くの避難民が蟄集していた。そこへ爆弾が直撃して、死体の山が築かれていたという。「淀川の堤防で食糧増産のために、牧場の

代わりにウシを飼っていたのです。そこへ爆弾が落ちて、人間もウシもいっしょくたに死んでいる、ウシは黒こげになって煙がふうっと出ている。ピフテキみたいな臭いがぶーんとただよっています」(手塚 1997: 58)。焼け死んでいた牛というのは、食糧増産のために河川敷で飼育されていた家畜であった。手塚の空襲体験を主題的に扱った作品『紙の砦』では、淀川の河川敷に避難しようと土手をのぼった主人公は、折り重なる炭化した死体の山を前に「これ…みんな人間かい…人形の焼けたんじゃないのかい……」と刮目しつつ絶句している。

手塚の動員されていた工場は淀川の東岸だったため、宝塚の自宅に帰るためには、淀川を橋で渡る必要があった。淀川を上流へ向けて歩き、橋にたどり着くが、橋脚のもとにも、爆弾に倒された無数の避難民の死骸が積み重なっていた。淀川に掛けられた長柄橋^{ながら}には、造兵廠方面を狙った爆弾が外れて落下し、惨劇が現出していた。手塚は、長柄橋橋脚の下の悲劇を目撃したものと思われる。

空襲当日、阪急線が運転できなくなったため、手塚は宝塚の自宅まで、線路沿いにおよそ30kmの道のりを歩いた。すさまじい空腹に襲われるも、ある女性から豊中^{とよなか}で図らずも握り飯を与えられ、感泣しながらほおぼる。第三次空襲の時点では、豊中市内は被害から免れていた。しかし、後日、握り飯を恵んでくれた女性宅に礼を述べるため再訪したところ、女性宅は空襲で焼け落ちており、女性の所在も不明であったという。戦時中の体験の回想的作品『どついたれ』には、手塚をモデルにした主人公が、空腹にさいなまれながら、日中帰路をとぼとぼと歩く姿がえがかれている。彼は、こう考える。

「彼は なぜ悪いこともしてない自分たちが
こうもみじめなめに あわなければ ならない
のか 考えた」

「そして こんなめに あわせた だれか知らない
責任者に たまらない怒りが こみあげ
てきた」

「ふと 彼は あの橋の下で つかんだ こん
がり焼けて においを たてて いる赤ん坊の
手を思い出した そして なんの ためらい
もなく 思った あれを 捨てずに 持ってれ

ば いま頃 食べた のになあ…」

「そのとき 彼の心には 良心だのモラルだの
なんて はいりこむ 余地が なかった ひた
すら ただ 食いたい欲望 だけであった」

石子順が指摘しているように、手塚が描く戦争とは、「軍隊なき戦争」であり、「一般民衆にとっての戦争」である。市井の市民が日常の中で体験する、災厄としての戦争である。手塚において「日常の戦争」とは、米軍機による爆撃と機銃掃射に集約されて描かれている。そこには、戦う主体としての主人公は登場しない。徹底的に害される無辜の生身の人間が描かれる。

壮年期を迎えた主人公が、戦争による死者であり、子どものままの姿をした同級生と再会を果たす夢想的な作品『カノン』では、戦時中の回想シーンにおいて、空襲の最中、主人公の少年をかばおうとした女教師は、米軍機の機銃掃射を受け、頭部を打ち砕かれて即死する。眼球と脳髓を辺り一面に飛散させた女教師の遺体はさながら「割れたスイカ」のようであったと描写されている。手塚が実際に、人間の頭部が「スイカ」が割れるように撃ち砕かれる瞬間を目の当たりにしていたかは定かではないが、空襲の惨劇の後、日中、「スイカ」のように頭蓋骨を砕かれた遺体の数々を目撃していたとしても不思議ではない。女教師の殺戮は、文字通り唐突な災厄であり、その死に積極的な意味合いは見いだせない。徹頭徹尾、死への意味づけを拒否した、「無意味な死」なのである。民衆の日常の中に、突如として挿入される「無意味な死」は、それを挿入した「戦争」への、皮膚感覚における嫌悪を掻き立てるものである。

彼の終生にわたる強固な反戦思想は、「無意味な死」を目撃したこと由来している。晩年に至るまで「戦争ほどみじめなものはない」のであり、「もう二度と、戦争なんか起こすまい、もう二度と、武器なんか持つまい、孫子の代までこの体験を伝えよう。あの日、あの時代、生き延びた人々は、だれだってそういう感慨をもったのです」と切々と語り、共産党にシンパシーを寄せていたのも、彼の深奥に突き刺さった反戦思想があったからであろう(手塚 2023: 143f.)。

そして、そのような「唐突な死」は、生命の儚さを痛感させる体験でもあった。ただ、生命の儚さ、脆さについての手塚の実感、生命を軽視させる方向へと彼を導かない。「唐突な死」によってすべてが奪われたとしても、それによって生命が消滅してしまうとは手塚は考えない。死によって遊離した生命は、宇宙的生命、総体的自然の中に還帰していくのである。手塚は強調する。「人命はかけがえがなく、人生はたった一度しかなく、死によってすべてが失われること、それと人間と同じ生命が自然界にみち、それらが密接に相互関係を保ちながら地球が存在するということ」への自覚が重要であると（手塚 2023：328）。

生命が儚いものであるからこそ、そこに「尊厳」を見いだすという発想は、手塚の根本的な世界観となっている。彼は、「生命の尊厳」は自身の「信念」であると言い切っている（手塚 1997：73）。「生命の尊厳」への実感に彼が貫かれたのは、終戦の8月15日の夜のことであった。「八月十五日の夜、阪急百貨店のシャンデリアがパーッとついている。外に出てみると、一面の焼け野原なのに、どこに電灯が残っていたかと思えるほど、こうこうと街灯がつき、ネオンまでついているのです。それを見てぼくは立ち往生してしまいました。「ああ、生きていてよかった」と、そのときはじめて思いました」（手塚 1997：64）。もはや空襲に殺されることはない、自ら目の当たりにし続けてきた「唐突な死」を自分は迎えずに済んだという安堵、これが手塚に自らの「生命」を実感させたのである。彼は、自身の作品の中に、「生きていたという感慨、生命のありがたさというようなものが、意識しなくても自然に出てしまう」と述べ、「生命の尊厳」が、思想というより人生観であることを吐露している（手塚 1997：64f.）。そして、自らの生命への感謝と、生命一般の尊厳への自覚は、次世代に向かって、明確に伝達されなければならない倫理なのであった。「子どもに生きるということの喜びと、大切さ、そして生命の尊厳、これを教えるほかないと思う」と彼は言う（手塚 2023：144）。幼少期、自由主義的な教育環境の中で育ち、教え込むことを嫌う教師たちに親近感を抱いていた手塚が、生命の尊厳は教え込むよりほかないと考えていたことには、彼の最晩年、昭和から平成

改元を迎えようとする世相への強い危機感が現れていると見ることができよう。

手塚は、原子力で駆動するロボットである「鉄腕アトム」が代表作だとされることで、未来において技術革新が人類を幸福へと導くというような思想をもっていると思われていることに不快感を隠していない（手塚 1997：75）。手塚のアトムに対する態度は、必ずしも温かいものとは言えない。というのも、アトムは何度も作中で突然死させられているからである。これは、近代科学と技術の粋を結集したアトムが、決して強靱ではないということと同時に、そのような人間の心を有するアトムは、人間と同様に「唐突な死」を迎える運命にあるということ、手塚自身が示唆しているからではないか。

手塚の生命観の源泉には、さらに二つのエピソードがある。夏目房之介^{ふさのすけ}は、手塚が幼少期に見た次のような夢的な体験に、手塚の生命観が原型的な形で現れているという（夏目 1995：188f.）。

子供のときの僕の夢は空飛ぶ夢とかそういうのはあまりなくて、やたらに見ているものがどんどん変わっていくような、また変わるものがセクシャルで僕の興奮につながるような……。[中略] 常に形が一定しないで、いろいろなものに変わる。たとえば僕と一緒に歩いている相手がいるんだけど、それは何かわからないが常に形が変わっている。僕に対して仕掛けることが常に違う。その恐怖感と同時にセックスアピールを感じる。[中略] 本当に異次元的なものですね。宇宙人なのか女どもなのかわからないが、僕の周りにとにかくそれがいるんです。それが常に変わる。

僕は宝塚に住んでいたんですが、学校の帰り道にちょっと寂しい沼があって、そこを歩いて家に帰るんです。小学生とか中学生のころそこを通る夢をよく見ました。沼地の横で得体の知れないものがブルブルふるえながら僕を待っている。それをつかまえて自分の家へ連れてくる。逃げ出すと困るから雨戸を閉めて、ふすまを閉めて絶対に出られないようにして、僕と物体が向かいあったところでたいてい夢がさめてしまう。その間も僕がそいつを見つけ、そいつ

が僕のところに寄ってきて、つかまえて家に帰るまでに、何だかわからないけどそいつがいつも変わるんです。

不定形・流動的で、不断の変容性をもち、恐怖心と同時に性的高揚感も与えるような生命を、身体的実感をもって感知していた。それが「いる」ということは、汎生命主義、ホリスティックな生命論的宇宙観へと、直接的に接続しているように思われる。

手塚は、1961年に奈良県立医科大学から医学博士の学位を授与されているが、その際の学位論文のテーマは「タニシの精虫」(精子)であった(異型精子細胞における膜構造の電子顕微鏡的研究)。本来は人間の精子の発生の仕組みを知りたかったというが、タニシの精虫の発生も、人間と似通ったものなので、人間の精子の発生を「類推」することにしたという(手塚 1999: 222)。「精子」は、それ自体が無数に群れつつ運動しながら、新しい生命の始まりを画する存在でもある。その原初性に手塚は惹かれたのであろう。

もう一つ、彼の生命観が垣間見られるエピソードがある。手塚が医学生の時、癌患者の臨終を看取った際のことである。いうまでもなく、手塚が医学生であった終戦直後は、癌は一般に不治の病であった。「苦しんで苦しんで、苦しみぬいて死ぬのが人間の死だと思っていたのです。死ぬときにこんなにほっとしたような顔をなさる。もしかしたら死というものは、われわれが頭の中で考えている苦しみを超越したものではないだろうか。何か大きな生命力みたいなものがあって、人間という肉体に宿っているのは、そのうちのごく一部の、一時の期間にすぎない。靈魂というか、生命体というものは、人間の体を離れたら、どこかに行ってしまうのではないか。別の生活をはじめのではないだろうか」(手塚 1997: 77)。宇宙的規模の波動があって、そのほんの一部が人間の肉体に共鳴して宿るものの、それはごく限られた時間に過ぎない。人間の肉体が減じたとしても、そこに化体していた生命の波動が減びることはなく、それは再び浮遊を開始し、別の肉体に宿る時を待つ。ここで手塚が語っているコズミックで連続的生命観は、ホリスティックな生命主義に到達しているように思える。

あっけない最期を迎える生命、すなわち「唐突な死」と、それにもかかわらず浮遊しつつ変容していく不滅の波動としての宇宙的生命。このふたつの生命観の共存が手塚の作品世界の特徴であり、それは、戦争体験が生み出した彼の世界観の反映であった。

2. やなせたかしの場合

戦争体験を複数の作品に描いた手塚と異なり、戦争体験を直接的に描いたやなせたかしの作品はない。しかしながら、やなせの戦争観は、代表作『アンパンマン』のキャラクター設定に濃厚に表現されている。手塚より9歳年長のやなせは、徴兵・従軍の経験があった。「銃後」で戦争を体験した手塚の戦争が、何より「空襲」に凝縮的に表現されていたのに対し、やなせの戦争体験は、従軍中の体験、すなわち戦地におけるものである。

やなせは、1919年2月、高知県香美市に誕生した(東京の北区出生とする文献もある。ただ、後述する父の没後間もなく、高知に転居している)。本名は柳瀬嵩である。そののち、現在の東京都北区に育つ。1924年、朝日新聞社の記者であった父が赴任先の上海で客死、その後母が再婚したため、やなせと生まれて間もない弟千尋は、高知県内で内科医院を開業していた伯父の養子となる。幼くして実の両親を失うことになった(離ればなれになった母親に対しては複雑な感情を抱いていたが、その後も面会を続けている。「アンパンマン」の登場人物ドキンちゃんには「母の面影」があると述べている)。高知県立高知城東中学校(現・高知県立高知追手前高等学校)を卒業後、日中戦争が勃発する1937年、東京高等工芸学校図案科(現・千葉大学工学部デザイン科)に入学し、翌年卒業する。学生時代は、銀座を闊歩しながらそのモダンで洗練された雰囲気魅了されたという。卒業後は、東京田辺製薬(現・田辺三菱製薬)宣伝部に就職した。1941年、22歳のとき徴兵される。陸軍の野戦重砲兵第5連隊補充隊(在小倉)へ入営する。旧制専門学校卒業という学歴を活かして幹部候補生に志願し、乙種幹部候補生に合格、暗号を担当する下士官となった。1943年、中国大陸に渡る。やなせが所属した重砲兵大隊は、米軍の中国大陸上陸を阻止するため、1944年秋、上海へ上陸後、

南下して福州へ向かい、再び上海に進軍することとなる。当時、フィリピンを陥落させていた米軍は、台湾を経由して中国大陸の制圧に乗り出すものと考えられていた（実際には、米軍は台湾を素通りして沖縄攻略へ向う）。やなせの部隊が扱っていた重砲とは、九六式十五糎榴弾砲であったが、これは攻城戦などに使用される重砲で、野戦では使いにくい代物だったと彼は述懐している。現地では暗号の作成・解読を担当するかたわら、宣撫工作（現地住民に対する広報活動）にも従事した。紙芝居を作って、中国人通訳を介して現地人に読み聞かせたりしていたという。その内容は、中国人と日本人を兄弟になぞらえ、その融和を強調するものであった。暗号作成と解読の業務そのものの負担は軽かったという。

1944年12月、京都帝国大学法科に進学し、海軍少尉であった弟・千尋が戦死する。台湾沖のバシー海峡で、彼が対潜任務室分隊士として乗艦していた駆逐艦「呉竹」が米潜雷ザックの雷撃を受けて撃沈されたのである。やなせの回顧談の中には、弟は「特攻隊」で戦死したと語っているものもあるが、これはやなせが、弟が人間魚雷「回天」搭乗員であったと誤解していたことによる。実際は、甲標的という特殊潜航艇を移送中の戦死であった。やなせが弟の戦死を知るのは、戦後郷里高知に復員した時であった。むろん、バシー海峡に沈んだ千尋の遺骨が実家に戻ることはなかった。

1945年、福州から北上、上海近郊に転戦する途上、小規模な銃撃戦を経験し、同部隊の戦友が戦死している。上海決戦を前に終戦を迎えた（最終階級・陸軍軍曹）。終戦時、やなせらは、泗溪鎮（現在の上海市松江区）にいた。中国において本格的な戦闘は経験せず、暗号班所属であったこともあり、実戦で銃弾を敵兵に対して放つことはなかった。従軍したにもかかわらず、激戦をくぐっていないという事実は、後年のやなせに「うしろめたさ」を感じさせることになる。

1947年、敗戦後帰郷していた高知で、月刊誌の編集者をして小松暢と結婚、上京する（小松暢の半生を描いたNHKドラマ・連続テレビ小説「あんぱん」が、2025年前期に放映予定である。主演・今田美桜。ドキンちゃんの「性質」は、暢がモデルである。なお、やなせ（劇中名は柳井崇）を演じるの

は北村匠海）。三越百貨店宣伝部にグラフィックデザイナーとして就職、1953年に三越を退社、専門の漫画家となり、四コマ漫画などを手掛けるが低迷が続く。1969年、劇場アニメ『千夜一夜物語』制作の際、手塚治虫から美術担当として招聘されている。この際、手塚を「天才」と感じると同時に、間歇的に見せる手塚のヒステリックな振る舞いに、強い感銘を受けたようである。

1973年、絵本「あんぱんまん」を発表、1988年には「それいけ！アンパンマン」としてテレビアニメ化される（2009年までの登場キャラクター数1768体。同年、「単独のアニメシリーズでのキャラクター数」が世界最多だとしてギネス世界記録に認定）。1993年には妻・暢が死去、暢との間に子はなく、前述のように唯一の肉親と言っている弟を戦争で失っていたため、以後天涯孤独の身となる。やなせはアンパンマンが自らの子どもだと思っている、とたびたび口にしてはいる。晩年は、度重なる入院生活を送りながらも、2013年10月、現役のまま94歳で死去した。郷里である高知県香美市には、やなせの寄付によるアンパンマンミュージアムが設立されている。

ニューブリテン島で、豪軍との壮絶な戦闘を経験し、マラリアに罹患するなど生死の間をさまよった水木しげるに比較すると、やなせの従軍体験は比較的安穏としたものであったように見えてくる。しかしながら、彼の戦争体験が、自身の作品世界に影を落としていることは確かである。

やなせにとっての戦争体験の第一は、飢餓である。断眠、長時間にわたる行軍にもまして、やなせにとって「空腹は耐え難い」ものであった。福州から上海への行軍中であろうか、空腹に耐えかねたやなせは雑草を食べたというが、酸味が強く食べることはできなかった。上海郊外に到達したのちも、上海上陸を目指すと考えられていた米軍との「決戦」に備えて、食料を備蓄することが求められ、十分な食事をとることができなかった。薄い粥のようなものが配給されたというが、到底空腹を満たせるものではなかったという。飢餓が絶対的な苦しみであるからこそ、そこから、「腹を空かせている人にパンを与えること」が絶対的＝普遍的な正義であるというやなせの倫理観が生まれる。食べ物を人に与えることに主眼を置くのは、「人生の楽しみの中で最大最

高のものは、やはり人を喜ばせること」、利他の喜びにあるという彼の人生観の反映である。

1969年に、大人向け作品として発表された際の「初代アンパンマン」は、人間だった（『PHP』1969年10月号）。やなせ曰く、「アンパンを配るおじさん。太っているし、ハンサムでもない」。「ぼろぼろのつぎはぎだらけのマント」を着ているが、この設定に至ったのは「正義のためにたたかう人はたぶん貧しくて新しいマントは買えないと思った」からであったという。「おじさん」アンパンマンは、戦争が起こっている地域のお腹をすかせた子どもにパンを届けようとするが、敵機と間違えられて撃墜され死亡する。この悲劇的で救いようのない結末は、当時の編集者から猛烈な批判を食らい、続編は刊行できなくなった。その後、パンそのものが飛んでいく方が面白いだろうという発想から、設定変更がなされたのが、「顔がパン」という、現在に至る「二代目アンパンマン」である。「二代目アンパンマン」は、初代と異なり、子ども向け絵本として刊行された。当初は「顔を食べさせる」という設定が幼稚園教諭から「残酷」であると酷評されたが、読者である子ども、特に低年齢児から受けた熱狂的支持は、長い冷遇時代をかこっていたやなせを一気にスターダムに押し上げることになる。

第二の戦争体験は、弟・千尋の戦死である。幼少期に父と死別、母と離別したやなせにとって、弟は唯一の肉親といってよい存在であった。快活で、学業も優秀であった弟は、旧制高知高校から京都帝国大学法科に進学した。当時のやなせは、弟に劣等感を感じていたという。アンパンマンは「コンパスで描ける」真ん丸さを特徴とするが、千尋も丸顔であったとやなせは述懐する（遺された千尋の写真を見る限り、それほど丸顔には見えないが、やなせの記憶の中の千尋は、アンパンマンと重なり合っていたのだろう）。やなせに言わせれば、アンパンは、おやつにもなるが、主食にもなる。高価なわけではないが、美味である。庶民にも親しみやすい食べ物なのであった。アンパンが、中身は餡、外身はパンというように、在来と外来のハイブリッド性をもっていることも、純粋性・純血性をファシズム的と嫌悪していたやなせの倫理観に響き合うもののように思われる。

海軍少尉であった千尋は、既に述べたように、1944年末、乗艦していた駆逐艦が、台湾沖で米潜水艦の魚雷攻撃を受け撃沈され、艦と運命を共にした。その8か月後、日本は敗戦を迎えるわけだが、やなせは、敗戦直後のモラルの焦土のなかで、「国のために戦う」「天皇のために死ぬ」という「絶対的な正義」だと誰もが疑わなかった「大義」が、いとも簡単に崩れ去るさまを目の当たりにする。弟の死は、聖戦完遂という大義に捧げられたはずであったのではなかったのか。「弟は何のために死んだのか?」、「弟の死は犬死にだったのか?」という疑問にやなせは苛まれる。そこから、やなせは、時代や国家に関わりない、普遍的な正義とは何かという思索を深めていく。やなせにとっての普遍的な正義とは「愛」であった。やなせにとっての愛とは、目の前で苦しむ人を救いたいという切実な思いであり、その愛は、「献身」を求める。献身とは、自分を傷つけ、犠牲にしてでも、目の前の相手に尽くそうとする態度である。自らの顔をちぎって腹を空かせた子どもに与えるアンパンマンは、やなせにとっての正義と倫理である愛と献身の具現化なのである。

さらに言えば、アンパンマンは、必殺技を持つわけでもなく、超人的な力をもつわけでもない。この性格は、やなせ自身が、終生自らの資質や才能をひけらかすことがなかった（むしろ、周囲の才能あるまんが家との比較による劣等感に苛まれ続けた）こととも通じるように思われる。アンパンマンがそのような「弱い」設定になっているのは、やなせが、アンパンマンが実現する正義と倫理の核を、「人助け」、つまり利他に置いているからである。苦悩している弱き者を助けることは、強き者でなくとも可能である。つまり、全ての人間を包摂する「弱さ」を連結させていくこと、それがやなせにとっての倫理の核心にあった。「戦争」を潜り抜けたやなせが到達したのは、倫理の実践に必要なのは、「どこにお腹をすかせた人がいるのか」ということに気づく感覚、すなわち「愛」と、その人のために、自らが傷ついても自分にできることをするという献身への決断だけだという確信なのであった。

おわりに：〈生存者〉のみが語りうる戦争

以上、戦争体験を有するまんが家のうち、手塚治

虫とやなせたかしの二人に焦点を当て、彼らの戦争体験と、それが彼らの作品世界や人間観に与えた影響を検討してきた。手塚は、戦争体験の影響を明示的に作品世界に反映させているし、戦争（それはアジア・太平洋戦争だけでなく、ベトナム戦争や、架空の戦争を含む）を直接の題材とした作品を数多く発表している。それに対して、やなせは、作品世界におけるモチーフとしての戦争は背景に退いているものの、特に晩年、戦争に関して活発に回顧的発言を行った。

終戦を17歳で迎えた手塚は、勤労働員中に大阪大空襲を経験し、爆弾の炸裂と機銃掃射によって殺戮される一般市民の惨状を目の当たりにした。それは、生命の儚さ、それゆえの生命の尊厳という、手塚の生涯にわたる創作の通奏低音をなす、トラウマティックな原体験となった。

終戦時26歳であったやなせは、陸軍兵卒として日中戦争に従軍し、上海近郊で耐えがたい飢餓を経験した。人間の経験しうる最も重い苦痛が飢餓であるという彼の確信がそこから生じ、それは彼の描くヒーローの存在意義が、他者の「空腹を癒やすこと」に置かれる前提となった。

当然ながら、彼らは〈生存者〉であるから、戦争が破局的な終末を迎えたということを、身をもって知っている。そのことが、彼らの戦争観に、破滅的なトーンを与えている。ただ、その終末的色彩は、彼らの代表作においては、必ずしも顕在化してはいない。私たちが彼らの作品に向き合うとき、それを完結した、不変の文化財として見るのではなく、時代の中で生成し、そして継承されてきた文化的実践として受容する構えが求められているように思われる。

附記

本稿の一部には、2023年度大阪公立大学「未来の博士育成ラボラトリー」（2024年3月23日）において、受講者の中高校生に対しておこなった講演の内容、および日本保育文化学会第10回大会（2024年9月7日、中村学園大学）における研究発表の内容を含んでいる。それぞれの聴衆諸氏に感謝する。

参考文献

- 石子順 (1990) 「手塚治虫と15年戦争」『文化評論』354
 小山仁示 (1989) 『大阪大空襲：大阪が壊滅した日』改訂、東方出版
 桜井哲夫 (1990) 『手塚治虫：時代と切り結ぶ表現者』講談社
 田浦紀子・高坂史章編著 (2017) 『親友が語る手塚治虫の少年時代』和泉書院
 竹内オサム (2008) 『手塚治虫：アーティストになるな』ミネルヴァ書房
 手塚治虫 (1997) 『ぼくのマンガ人生』岩波書店
 手塚治虫 (1999) 『僕はマンガ家』日本図書センター
 手塚治虫 (2007) 『手塚治虫「戦争漫画」傑作選』（1・2）、祥伝社
 手塚治虫 (2017) 『手塚治虫傑作選「戦争と日本人」』祥伝社
 手塚治虫 (2023) 『手塚治虫と戦争』小学館クリエイティブ
 中村圭子編 (2009) 『やなせたかし：メルヘンの魔術師90年の軌跡』河出書房新社
 夏目房之介 (1995) 『手塚治虫の冒険：戦後マンガの神々』筑摩書房
 PHP 研究所編 (2012) 『やなせたかし：明日をひらく言葉』PHP 研究所
 マリオッティ (1999) 「「それいけ！アンパンマン」の社会学」『ソシオロジ』(44) 2
 水木しげる (2016) 『水木しげるの戦場：従軍短篇集』中央公論新社
 宮部精一ほか (2013) 『漫画家たちの戦争：別巻資料』金の星社
 やなせたかし (2013) 『アンパンマンの遺書』岩波書店
 やなせたかし (2013) 『わたしが正義について語るなら』ポプラ社
 やなせたかし (2013) 『何のために生まれてきたの？：希望のありか』PHP 研究所、2013年
 やなせたかし (2022) 『ボクと、正義と、アンパンマン：なんのために生まれて、なにをして生きるのか』PHP 研究所
 やなせたかし (2022) 『ぼくは戦争は大きい：やなせたかしの平和への思い』新装版、小学館
 山口一樹 (2022) 「戦場体験が問いかける「生存」とナラティブ：やなせたかしと水木しげるの比較を通じて」『立命館平和研究』23
 吉田直哉 (2016) 「「アンパンマン」の正義論」『東京成徳大学子ども学部紀要』5
 吉田直哉 (2024) 「私は命のパンである：アンパンマンからの倫理学」『學燈』121 (4)

受付日：2024年10月1日